

とよ とみ ひで よし ひで なが
豊臣秀吉と秀長
てん か きょう だい
天下をとった兄弟

せんごく ぶししょうものがたり
戦国武将物語

お ざわ あき とち いわ もと
小沢章友／作 岩本ゼロゴ／絵



講談社 青い鳥文庫

も

く

じ

登場人物
とうじょうじんぶつ

4

第一章
だいしやう

小竹、兄の家来になる
こちく、あにけらいになる

6

第二章
だいにしやう

兄弟で、奮戦する
きやうだい、ふんせんする

32

第三章
だいにしやう

羽柴秀吉と秀長
はしばひでよし、ひでなが

73

第四章
だいにしやう

信長、秀吉に怒る
のぶなが、ひでよしにおこ

94

第五章
だいにしやう

二人の軍師
ふたりぐんし

109



第六章 だいろくしょう

本能寺の変、光秀との決戦 ほんのうじへんみつひでけつせん

124

第七章 だいろくしょう

おいらの城、大坂城 しろうおおさかじょう

165

第八章 だいろくしょう

天下を統一する てんかとういつ

189

第九章 だいろくしょう

秀長と秀吉の死 ひでながひでよし

209

豊臣兄弟 天下統一への道 とよとみきょうだい てんかとういつみち

全国地図 ぜんこくちず

216

豊臣兄弟の年表 とよとみきょうだいねんびよう

218

弟・豊臣秀長の せいのとよとみひでなが

すごさとは!? すごさは!?

220



謀反

あけちみつひで
明智光秀

のぶなが じゆしん しゆくん そむ
信長の重臣ながら主君に背き、
ひでよし たいりつ
秀吉と対立することになる。

とう
登

じょう
場

じん
人

ぶつ
物

とよとみきょうだい ささ ひと
豊臣兄弟を支えた人たち



たけなかはんべえ
竹中半兵衛

しゆくん
主君

ひでよし てんさいぐん し たんめい
秀吉につかえた天才軍師。短命なが
せんれつ さい のこ
らも、鮮烈な才を残した。



くろだかんべえ
黒田官兵衛

ちりやく ひでよし あひび てんか どういつ
智略をつくし秀吉を導き、天下統一
をささ めいぐん し
を支えた名軍師。



とうどうたかとら
藤堂高虎

ひでなが かしん ちくじょう めい
秀長の家臣としてつかえ、築城の名
しゅ だいりやう
手としてのちに大名となる。

はちすかころうく
蜂須賀小六

どごう で ひでよし わか ひ
土豪の出。秀吉と若き日に
で あ すのまたしやう
出会い、墨侯城の
ちくじょう かつやく
築城などで活躍。



とくがわいえやす
徳川家康

たいりつ
対立

とうばつ
討伐

とうばつ わぼく
討伐のちに和睦

ちやうそ か べもとちか
長宗我部元親

し こくとういつ は ひでなが
四国統一を果たすも、秀長
しんこう う しゅうぞく
の侵攻を受け、のちに従属。

もうりてるもと
毛利輝元

ちやうごくち ほう だいろう ひでよし
中国地方の大名。秀吉と
わぼく ふくぞく
和睦、服属へ。

とくがわいえやす
徳川家康

みかわ ゆう ひでよし てんか
三河の雄。秀吉と天下を
きそ
競うライバル。

おや こ
親子

お だ の ぶ な が
織田信雄

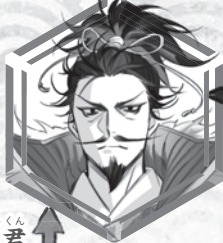
のぶなが じなん ちち しこ お だ け
信長の次男。父の死後、織田家
のあとつぎを主張し、秀吉と対
立する。

しゅくん
主君

お だ の ぶ な が
織田信長

てん か どう い つ か く
天下統一をめざし各
地で戦を重ね、霸道
を駆け抜けた戦国の
武将。

しゅくん
主君



しば た か つ い え
柴田勝家

はくりく お だ け もうしう
北陸をまかされた織田家の猛将。
のぶなが こうけい ひでよし たいりつ
信長の後継をめぐり秀吉と対立
する。



いち か た
お市の方

のぶなが いしと あざい ながまさ おいで さん
信長の妹。浅井長政との間に三
にん むすめ ちゃちゃ はつ ごう
人の娘、茶々・初・江をもうける。
ちゃちゃ ひでよし そくしつ
茶々はのちに秀吉の側室となり
「淀君」と呼ばれる。

あざ い なが ま さ
浅井長政

おうみ せんごくだいおう のぶなが いしと
近江の戦国大名。信長の妹・お
いち つま
市を妻とするが、のちに信長と
てきない
敵対。

まえ だ と し い え
前田利家

お だ け しゅじん わか ひでよし
織田家の重臣で、若き秀吉と
かた ゆうじょう むす ぶしう
固い友情を結んだ武将。

ゆうじん
友人

とよとみ ひでよし
豊臣秀吉

お だ のぶなが ぶし みち き
織田信長のもとで武士への道を切り
ひらき、信長の死後、天下をめざす。



とよとみ ひでなが
豊臣秀長

ひでよし じつてい わか あに たす
秀吉の実弟。若いころから兄を助
け、ともに戦場を駆けぬける。

とうぼく
討伐

しまづ よし ひ さ
島津義久

きゅうしゅう せつけん しまづ けとうしゅ
九州を席卷した島津家当主。
ひでよし たいぐん こうふく
秀吉の大軍に降伏した。

第一章 だいいしやう

小竹、兄の家来になる こちく、あにけらいになる

序 じよ

「秀吉さまの、根になりなされ。」

軍師の竹中半兵衛が息を引きとる日に残した、そのことばを、小一郎秀長は生涯にわたって忘れなかつた。

「秀吉さまは、どこまでも高く、高く、伸びていかれる大木です。しかし、大木はしっかりとした根がなければ、たおれてしまいます。小一郎どの、大木を支える根となりなされ……。」

大木の根となれ、か……。くるしい息づかいの半兵衛を、小一郎は見つめた。

「秀吉さまと小一郎どの、すばらしいご兄弟であり、お二人が力を合わせれば、望むも

のを手に入れることができるでしょう。そのために、小一郎どのはこれまでどおり、根となつて、秀吉さまを支えていきなされ……。」

のどからしぼりだすような、かすれ声の半兵衛に、小一郎は胸からこみあげてくる熱いものをこらえた。

そして、半兵衛のことばどおり、秀吉が大木となつて伸びていけるように、小一郎は地中深くの根となつて、秀吉を支えつづけた。

一

(兄やん……。)

天文十三年(一五四四)の春だつた。尾張の国、愛知郡中村郷で、木に登っている兄の日吉を、五歳の小竹は心配そうに見上げていた。

「小竹、見えるぞっ!」高い木の上で、八歳の日吉が小さな体には似合わない大きな声で、さげんだ。「おいらの城が、見えるぞっ! でっかい、でっかい、おいらの城だぞっ!」

そのとき義父の竹阿弥が小竹のそばにやって来た。木の上にいる日吉を見て、竹阿弥はにがにがしげにいった。

「小僧め、村じゅうに聞こえる声で、なにをわめいておるのじゃ。城なんぞ、ここいらにはありやあせん。見わたすかぎり、田んぼと畑ばかりじゃ。それに、なにがおいらの城だ。そんな城、この世のどこにもないわ。」竹阿弥は小竹の頭をやさしくなでた。「よいか、小竹。あほうな日吉のことなど、聞いてはならんぞ。あやつは、いまからお寺へ奉公に行くんじや。」

（兄やん。）小竹は思った。（お寺に行くんか……。）

竹阿弥の後ろには、母のなかが、あさひを抱いて立っていた。

日吉も、小竹も、竹阿弥の子ではなかった。なかの前の夫で、弥右衛門の子だった。弥右衛門は織田家の足輕だったが、戦だけがしてから、なかとともに田畑をたがやす生活に変わり、一年前になくなっていった。

「日吉よっ！」竹阿弥は木の上の日吉に向かって、どなった。「さつさと下りてこんか！寺に行くぞ！」

なかが赤子のあさひを抱きしめて、目がしををおさえた。

（おつかあ……）小竹は母を見て思った。（おつかあが、泣いとる。）

「めそめそするな、なか。」竹阿弥がいった。「日吉のような、らんぼう者は、寺小僧になつて、みっちりしつけてもらうのがいいんじや。読み書きだつて、教えてもらえるんじやぞ。」

泥のついたほを、ふつとふくらませ、日吉がしぶしぶ木から下りてきた。髪はぼうぼうで、ぼろぼろの袖から、やせほそつた腕をぶらぶらさせ、つぎあてだらけの衣からは、真つ黒なひざがしらが飛びだしている。

「ようし、日吉。」竹阿弥は日吉の日に焼けて黒ずんだ耳をつかみ、ぐいつとひっぱつた。「寺に行くぞ。」

日吉は、猿そつくりのしかめっ面になり、竹阿弥の手を強くふりはらつた。

「こいつ！」竹阿弥は日吉をにらみつけて、なぐろうとしたが、なかの顔を見て思いとどまった。「なか、小竹をつれて、家に帰れ。」

なかは目を真つ赤にしてうなずき、日吉に向かつて、いい聞かせた。

「日吉よ、くれぐれも体からだに氣きをつけてな。お寺てらでは、住職じゆうしやくさまのいうことを聞きいて、かわいがつてもらうんじゃぞ。」

日吉ひよしはくちびるをかんで、こくと、うなずいた。なかの婿むこになつて家いえに入りこんだ竹阿弥あみを、日吉ひよしはひどくきらつていたが、母ははのいうことには決けつしてさからわなかつた。

「さあ、お寺てらさんがお待ちじゃ。」

竹阿弥ちくあみに連れられ、村むらでただ一つのお寺てら、光明寺こうみょうじに向かつて、いやいや歩あるいて行く日吉ひよしを、なかは目めに涙なみだをうかべて見送みおくつた。

村むらじゅうの子こどもを集あつめて戦いくさごつこをしたり、隣村となりむらの子ことけんかしたりする日吉ひよしの後うしろにくつついていた小竹こちくは、今日きょうから兄あにがいなくなることに、さびしさを覚おぼえた。

(兄にいやんがいなくなれば、遊あそんでもらえない。) そう思おもつて泣なきたくなつたが、小竹こちくはけんめいにこらえた。(早はやくもどつて来きて、兄にいやん……。)

それから四年ねんがたち、村むらの畑はたけに菜なの花はなが咲さきはじめた朝あさのことだつた。

「小竹こちく、いたか。」

日吉ひよしが息いきをはずませ、家いえに走り入はいってきたのだ。妹いもうとのあさひの子守こもりをしていた小竹こちくは、兄あにの顔かおを見みて、おどろいた。

日吉ひよしは背せたけこそ変かわらなかつたが、寺てらの小僧こぞうが着きる衣ころもはびりびりに破やぶれ、ひたいに、こぶをいくつもこしらえ、茶色ちやいろの目めのまわりやほおには、ひどくなぐられたあざがあつた。

「兄にいやん。」泣なきだしたあさひをあやしなから、小竹こちくはいつた。「その顔かおはどうしたんや？」

日吉ひよしはしわだらけの顔かおをくしやくしやにして笑わらつた。

「かたきを、やつつけたんじや。」

「かたきつて？」

小竹こちくがたずねると、日吉ひよしはぐうつと胸むねをはつて、とくいそうにいつた。

「三つ年上としうえの仁王におうという、体からだばかりでかい寺男てらおとこじや。おいらを馬鹿ばかにして、いじめくさつていたから、もうがまんならんと、こつぴどく、たたきのめしてやつたんじや。」

（ほんとうは、兄にいやん、仁王におうという寺男てらおとこになぐられたんじやないのか？）

そう考^{かんが}えながら、小竹^{こちく}はいった。

「でも、そんなことをしたら、住職^{じゆうしやく}さまにひどく怒^{おこ}られたやろ？」

日吉^{ひよし}は口^{くち}をとがらせて、強^{つよ}く首^{くび}を横^{よこ}にふった。

「いいんじや。寺^{てら}は飛^とびだしてきたから。」

「えっ？」

小竹^{こちく}がびつくりしていると、日吉^{ひよし}は家^{いえ}を見^みまわした。

「おつかあは、いないんか。」

「おとうと、田^たんぼに行^いったんじや。」

小竹^{こちく}がいうと、日吉^{ひよし}は泥^{どろ}のついた顔^{かお}をしかめ、ざんねんそうにいった。

「おつかあには、あいさつしてから行^いきたかったが、まあ、しょうがないか。」

「行^いくつて……。」小竹^{こちく}はまじまじと日吉^{ひよし}を見^みやった。「どこに行^いくんや、兄^{にい}やん。もどつ

て来^きたばかりなのに……。」

「天^{てん}下^かじや、小竹^{こちく}。」日吉^{ひよし}は胸^{むね}をはって、大^{おお}きな声^{こえ}でいった。「おいらはひろい天^{てん}下^かに出^で

行^いくんじや。こんな、せまつくるしい村^{むら}は、おいらには似^に合^あわん。おいらにふさわしいと



ころへ、出て行くんじや。」

日吉はそういうと、家の奥の戸棚をあけた。だいじにしまつてあつた、弥右衛門がのこしてくれた錢をふところに入れると、小竹にいった。

「さらばじゃ、小竹。いつかりっぱな侍になつて、おまえとおつかあとあさひを迎えに来るからな、待つていろ。」

(兄やん……。) 小竹は泣きそうになつた。(また出て行くんか。)

泣きやんでいたあさひが、ふたたび泣きだした。小竹があさひをなだめる間に、日吉は家から飛びだして行つた。

それから、天文二十三年(一五五四)の春がやつて来た。

十五歳の小竹は、村のおとなたちに負けなくらい、背だけが伸びていた。中村の家は、義父の竹阿弥が病でなくなり、なかと小竹、あさひの三人で田畑をたがやして、毎日をつつましく暮らしていた。

その日、朝の野良仕事を終えたあと、小竹は母と妹といっしょに家にもどり、菜っ葉

の入ったにぎり飯を食べていた。

「よしよしつ、みんな、そろつているなつ！」

とつぜん日吉が、家に飛びこんで来たのだ。色の黒い、しわだらけの顔は変わらなかつたが、身なりは前とはみちがえるような、こざつぱりした侍姿だつた。

（兄さん……。）小竹はまじまじと日吉を見つめた。（もしかして、侍になつたんか？）

「おつかあ、ひさしぶりじゃなあ。」日吉は村じゅうにひびきわたるような声でいった。

「小竹、背が伸びたな、たのもしいぞ。あさひも、えらいべつぴんさんになつたな。」

日吉は小竹のにぎり飯をうばいと、むしやむしやと、ほおばつた。

「うまいつ！ おつかあの菜っ葉飯は、天下第一品じゃ！」

なかとあさひは、おどろきのあまり、しばらくことばを失つていた。

「兄さん。いままで、どうしていたんや。そのかつこうは、侍やないか。」

小竹がいうと、日吉はにぎり飯を食べ終えて、にいつと笑つた。

「そうじゃ、侍や。話せば長くなるけどな。あれから、おれは東海道を下つて、いろんな国をまわつた。遠江の国で、うまいぐあいに頭陀寺城主の松下加兵衛さまに召しかかえ

られ、せつせとはげんで、納戸役に取り立ててもらったんじや……。」「日吉は無念そうに、息をついた。「ところが、おれの出世の早さをねたんだ小姓どもが、おれにつらく当たつての。見かねた松下さまが、すまんが生まれ在所へ帰つてくれんかと、路銀をくださったんじや。」

日吉のくやしそうな顔を見て、小竹はいった。

「そりやあ、くやしかつたらうな、兄さん。」

しかし、日吉はしよげかえることなく、ぐうつと胸をはった。

「かまわん、かまわん。おれは納戸役なんぞでは、終わらん。昔、おれがいったのを、小竹は聞いたろう。おいらの城が見えるぞ、と。あれは大ぼらではないぞ。きつとそうなる。まちがいない。」

「あいかわらずじやのう、日吉は……。」「なかが氣を取り直したようにいった。「おかしな夢ばかり見とる。」

すると、日吉が大声をだした。

「おつかあ、夢じやないぞ！ この目に、ちゃんと見えとるんや、おれの城が。」

「日吉のお城かい。」なかはこまったように笑った。「そうなりやあ、どんなにいいかねえ。それより、日吉よ。せつかく家にもどつてきたんじゃ。ここいらで腰を落ちつけたらどうじゃ。」

日吉は口じりをきゅつとあげ、「おつかあには、かなわんな。」と小さくこぼした。
(そうだよ、兄さん。) 小竹は思った。(今度こそ、家にいついて、おいらたちと畑仕事にはげんでくれよ……。)

小竹となかの望みは、かなわなかった。あくる朝、日吉はなかと小竹に頭を下げていった。

「おつかあ、小竹。おれは出て行く。」

「出て行くつて、帰つてきたばかりじゃないか。」なかは眉をよせた。「いつたい、どこに行くんじゃ?」

日吉は顔を上げて、きらきらと茶色の目をかがやかせた。

「織田信長さまにおつかえしようと、おれは思っているんじゃ。」

「信長さまじゃと?」なかがいった。「うつけ、たわけといわれとる、あのお方にか?」

「おつかあ、信長のぶながさまはうつけではないぞ。」日吉ひよしは真顔まがおもになった。「てんでんばらばらだった尾張おわりの国くにを、ちやくちやくと手てに入れておられる。いずれ尾張おわりだけでなく、たくさんの国くにをつかみとられるぞ。信長のぶながさまこそ、おれのあるじにふさわしいお方かたなんじゃ。信長のぶさまのもとで、おれは城しろをもつ夢ゆめをかなえるんじや。」

早口はやぐちでいうと、日吉ひよしはすつくと立ち上あがつて、家いえから走り出はした。

「日吉ひよしめが。」なかが深ふかいたため息いきをついた。「あんな馬鹿ばかなことをいうて……。」

（兄にいさんは、まだ見ているんか。）寺奉公てらほうこうの日ひにさけんでいた日吉ひよしを、小竹こちくは思おもった。
（でつかい、でつかい、兄にいさんの城しろを、いまでも見ているんか……。）

二

日吉ひよしは家いえを飛とびだしたあと、つらつらと考かんえた。

（おつかあや小竹こちくには、ああいったが、どうすれば信長のぶながさまに、おつかえすることができ
るだろう？）

あれこれ考えた日吉は、じかに信長にうつたえようと決心した。遠出が好きで、野を駆けまわっている信長の帰り道を待ち伏せすることにしたのだ。

次の日、日吉は道の端にひれ伏して、信長を待った。

(信長さまは、ここをきつと通る。)

そう信じてひれ伏していると、およそ若君らしくない、がき大将のような格好で、信長が干し柿を食べながら、黒い馬に横ずわりになって、やって来た。

(よし、来たぞ。)

日吉は顔を上げて、さげんだ。

「おそれいまするっ！ それがしを、お屋形さまの草履とりのはしくれに、くわえてくださりませつ！」

馬上から切れ長の目を日吉に投げて、信長はいきなり笑いだした。その顔にあらわれている信長の心を、日吉は敏感に読みとった。

(なに？ 猿が、おれの草履とりになりたいだ？ そいつは、ゆかいだ……。信長さまは、そう思われたのだ。うん、そうだ、おれはこの方の気持ち、なぜかわかるぞ。)



日吉は顔をくしゃくしゃにして、子どものころから、からかわれていた猿顔をつくり、ここぞとばかり、必死でさげんだ。

「なにとぞ、なにとぞっ！」

信長がからからと高笑いをして、たずねた。

「そなた、名は？」

しめた、気に入ってもらえたぞ！ 日吉がこたえようとしたとき、信長が先にいった。

「猿だ。そうだな、猿。」

信長さまは、おれのことを面白がつておられる。そう思った日吉は、地べたに頭をすり

つけ、大きな声でこたえた。

「ははっ、猿でございます！」

そのとき初めて会ったにもかかわらず、日吉は信長のことがいつぱんで好きになった。

（この方は、ちつともこだわりがない。やはり、あるじにふさわしい方だ。よし、おれは信長さまに命をささげるぞ。）

信長も、日吉のことが気に入った。

(こやつ、みような愛嬌がある。おれのまわりに、こんなやつはいない。ひとつ、草履を

とらせてみるか。)

こうして日吉は、信長につかえることになった。

日吉は、信長がなにをのぞんでいるか、ひたすら理解しようとつとめた。なにを命じられてもいいよう、朝早くから庭先にひれ伏して、信長を待った。素足で飛び出してくる信長のため、草履をふところに入れてあたためた。

「ん？」

なぜか草履があたたかいのを知ると、信長はにやりと笑い、水の入ったひょうたんを投げつけて命じた。

「行くぞ、猿。ついてこいっ！」

日吉はひょうたんをかかえ、馬に乗った信長のあとを必死で走ってついていった。

いかなるときもなまけず、けんめいにつとめたことで、日吉は、弓組頭の浅野又右衛門の下に入ることになった。長屋を一つもらい受け、名も木下藤吉郎とあらためた。

(どんなときでも、信長さまの気持ちになつて考え、信長さまの気に入るよう、気に入る

ようにおつかえするのだ……。）それを心がけるうちに、藤吉郎はあることを理解した。
（血を分けた兄弟や母、重臣たちにも、心をひらかれない信長さまは、自分をとことん愛
してつかえる者には、心をひらいてくださるのだ……。）

そのとき藤吉郎は、いま一つの真理を理解した。

（なぜおれは、松下家の小姓や寺男の仁王にきらわれたのか？ それは、おれが彼らをき
らったからだ。だから、やつらもおれをきらったのだ。人の心はかんたんなことで左右さ
れる。相手を好きになれば、相手も好きになってくれる。そして相手の心を読みとろう
と、けんめいにつとめれば、その心がおのずとわかるのだ……。）

のちに「人たらしの秀吉」として、どんな相手でも、その心を、がしつとつかむ技を、
このとき藤吉郎は身につけたのである。

かゆいところに手がとどく細かな気づかいをする藤吉郎を、信長はためしに足輕十人の
頭にしてみた。

すると藤吉郎は、足輕たちを自分の長屋に入れ、一人一人の気持ちをたいせつにして、
すべてを平等にした。同じように飯を食べ、同じようにものを分け与えたのだ。

「木下さまはよいお方だ。わしらのことを、ようわかってくださる。」

足輕たちは感激して、けんめいに働いた。そうした様子を見て、信長は藤吉郎を足輕組頭にした。たつた二年たらずで、大出世したのだ。さらに炭奉行をまかせると、それまで使っていた炭が三分の一ですむようになった。

（猿め、使いでのあるやつだ。）

家柄とか血筋にとらわれず、能力のある者を重んじる信長は、藤吉郎をとことん使ってみることにした。

そのころ信長はちやくちやくと勢力を伸ばしていた。弟、信行のむほんをしりぞけ、織田本家を攻め落とし、尾張上四郡を手に入れ、父の信秀さえなしとげられなかった尾張統一をはたしたのだ。

ところが、これまでになかった危機が信長におとずれた。駿河・遠江・三河の三国を支配する今川義元が、京へのぼって天下に号令をかけるべく、二万五千の大軍をひき連れ、西へ向かつて進んできたのだ。

「今川が来るぞ。」

「とちゅうの尾張は、踏みつぶされてしまう。」

織田の兵力は四千そこそこで、二万五千の今川軍とぶつかつたら、ひとたまりもなかつた。しかし、織田家の者たちがうろたえるなか、信長一人は冷静だつた。

(信長さまなら、勝てる。) 藤吉郎は信じていた。(おれはかならず、でっかい城を持つ。おれには強い運がある。そのおれがつかえる信長さまが、今川なんかには負けるわけがない。)

その日は、激しい雨風になつた。

今川義元は織田に勝つたと思ひこみ、田楽狭間で祝いのうたげをひらいている。それを知ると、信長は降りしきる雨のなか、三千の兵で、今川の陣地に突入した。

「ねらうは一人、義元的首だつ！」

初めての戦に出た藤吉郎は、ぶんぶん槍を振りまわし、大声でわめくばかりだつた。

「死ねやつ、死ねやつ！」

信長はゆだんしていた義元を討ちとつた。この戦いで大きな恩賞を受けたのは、義元的首をとつた毛利新介ではなく、田楽狭間に義元がいることをつきとめた築田政綱だつた。

（これが信長さまだ。大将の首をとった者より、勝つ状況をつくった者をよしとされたのだ。）武勇にすぐれているとはいえない自分に、藤吉郎はいい聞かせた。（信長さまにつかえていれば、おれの出番がきつとやつて来る。）
あくる年、藤吉郎は、上役の浅野又右衛門の娘、ねねを妻にと申しこんだ。又右衛門はためらったが、ねねはことわらなかつた。

「藤吉郎さまの心ばえ、まれにみるかしこさ、底ぬけの明るさが、好きなのです。」
永禄四年（一五六一）、八月に、二人の祝言はおこなわれた。

そのころから藤吉郎の胸に、ある思いがきざしていた。

（おれは、信長さまにどうすれば気に入っていただけるか、それだけを考え、ひたすら信長さまを、お支えしていく……。そしておれは、そんなおれをひたすら支え、助けてくれる者が欲しい……。）

永祿五年（一五六二）、小竹は二十三歳になつて、体も大きくなり、母のなかや妹のあさひと、弥右衛門の残してくれた烟をたがやす日々を送つていた。ここ数年は豊作がつづき、家の暮らし向きもかなりよくなつていた。

夏の日ざしが照りつけるなか、烟をたがやしつづけたあと、小竹はひと休みした。流れる汗を手ぬぐいでふきながら、ふと思つた。

（兄さん、どうしているかな……。）

その気持ち、口をついて出た。

「兄さん、どこにいるのやろう。信長さまにつかえると出ていったけど、侍になれたらうか。」

小竹のつぶやきを聞いて、なかが、ふうつと息をついた。

「日吉か……。あれは烟仕事をいやがり、たいそうな夢ばかり抱いておつたが。いまはどうしとるやら、元気でいればいいがのう……。」

すると、あさひがいった。

「日吉兄さんのこと、わたし、覚えていない。」

小竹こちくがうなずいた。

「あさひは、小さちいかったからな。」

ふたたび畑はたけをたがやしていると、馬うまの駆かけてくる音おとがして、大きな声こえが響ひびきわたった。

「おつかあ、小竹こちく、あさひ！　ここにおったか、おれだつ！　日吉ひよしつ、いや藤吉郎とうきちろうだつ！」

小竹こちくはおどろいて、畑はたけに、くわを落おとしそうになつた。

藤吉郎とうきちろうと名のつた兄あには、馬うまから飛とびおり、畑はたけに走はしり入いつてきた。色いろの黒くろいしわだらけの顔かおは変かわらなかつたが、こぎれいな着物きものを着きた姿すがたに自信じしんがみなぎっていた。

（ひよつとして、織田家おだけで侍さむらいになつたんか、兄さん。）

小竹こちくが思おもつていると、なかが目めを丸まるくして、いった。

「ほんまに、日吉ひよしか？」

「そうじゃ、ほんまにおれじゃ。」藤吉郎とうきちろうはうなずいてから、急いそいで首くびを横よこにふつた。「いやいや、いまは日吉ひよしじゃないぞ。木下藤吉郎きのしたとうきちろうじゃ。これからは、藤吉郎とうきちろうと呼よんでくれや。おれは織田家おだけの、れつきとした足輕組頭あしがるくみがしらなんじゃから。」

「なんと、日吉が？」なかがさらに目を丸くした。「織田家の、足輕組頭じゃと？」

「おうよ。信長さまに働きを認められ、いまは錢を百貫もらって、三十人の足輕をまとめとるんじや。」

藤吉郎はぐうつと胸をはり、ほこらしげにいった。

（兄さん、ほんとうに足輕組頭になつたんか。）

小竹はくわを持ったまま、まぶしそうに兄を見やった。

「小竹よ、大きゆうなつたのう。おれよりも頭一つでかいぞ。うん、たくましゆうなつた。見るからにたのもしいぞ。」それから藤吉郎は、思いがけないことを口走つた。「おれの家来になるには、じゆうぶんじや。」

「えっ？」小竹は耳をうたぐつた。「兄さんの、家来に？」

藤吉郎は茶色の目をかがやかせ、何度もうなずいた。

「そうじや、小竹。おまえも、おれと同じ侍になれ。まず、おれの足輕組に入つて、おれの家来になれ。」

「いかん、いかん！」なかが首をふつた。「小竹は、侍になんぞ、ならん。弥右衛門のよ

うに、戦いくさだけがをしたら、どうするんじや。けがならまだしも、死ぬかもしれんぞ。」

「おつかあ、心配しんぱいはいらん。おれが、小竹こちくを守る。小竹こちくをあぶないめには、あわせん。」

藤吉郎とうきちろうはなかに向むかつて、きつぱりといつてから、小竹こちくを見みやった。

「なあ、小竹こちく。おれといつしよに、信長のぶながさまにおつかえしようぞ。信長のぶながさまは天下てんかをとら

れる。これはまちがいない。おれは信長のぶながさまのおゆるしを得えて、昨年さくねん、弓組頭ゆみぐみがしらの浅野あさの又

右衛門えもんさまの娘むすめご、ねねどのを嫁よめにもらった。おれはかならず出世しゅっせして、でっかい城しろをも

つ。なあ、小竹こちく、おれを信しんじて、おれの家来けらいになつてくれ。」

藤吉郎とうきちろうの顔かおは、真剣しんけんそのものだった。

「なにつ、おまえは嫁よめごをもらったんか！」なかがおどろいたようにいった。「おらに、

なんもいわんで……。」

(どうしよう……。)

小竹こちくはとまどつていた。いきなり侍さむらいになれと兄あににいわれ、すぐ返答へんとうできなかつたが、

それでも、これまで考かんがえたこともない明日あしたへのまぶしい光ひかりが、心こころに射さしこむを感じかんじたの

だ。

「小竹、おれは約束する。おまえを、りっぱな侍にすると。」

藤吉郎はまん丸い目で、小竹を見て、自信たつぷりにいった。

（おいらが侍になんか、ほんとうになれるのか？）

小竹はあらためて兄を見つめた。その姿は、つぎあてだらけの衣を着た兄ではなく、寺男の仁王になぐられ、顔じゅうあざだらけの兄でもなかった。子どものころからの夢をかなえ、腰に二本の刀を差している、さつそうとした侍姿の兄だった。

小竹の胸に、ふしぎな勇気がわいた。

（よし、兄さんを信じよう。くわを捨て、兄さんの下で働いてみよう。）

小竹は藤吉郎の顔をまっすぐに見て、ためらいのない口調でいった。

「わかった、兄さん。おいらは、兄さんの家来になる。兄さんのでっかい城に住んでみたいから。」

藤吉郎が、にぎり飯がぽんと入るほどの大きな口をひらいて、高笑いした。そして村じゅうに響きわたるような声でいった。

「ようし！ よういった、小竹！ それでこそ、おれのたった一人の弟じゃー！」

第二章 だいいしやう

兄弟で、奮戦する きやうだいい ふんせん

一

「おれの、だいじな嫁よめご、ねねどのじゃ。」

藤吉郎とうきちろうがてれくさそうに、十四歳さいのねねを紹介しょうかいしたとき、きりつと澄すんだ目めの、ねねのうつくしさに、小竹こちくは息いきのつまるような思おもいを抱いだいた。

（なんて、きれいな兄嫁あによめだろう……。）

小竹こちくは大きな幸運こううんが兄あにについているのを感じかんじた。

「まあ、ねねでいいのです。どのは、いりませんよ、藤吉郎とうきちろうどの。」

ねねはやわらかな口調くちやうでいった。

「いやいや。たいせつな嫁よめごの、ねねどのじゃ。」藤吉郎とうきちろうはぐつと胸むねをはり、小竹こちくをねね

に紹介した。「これが、おれの自慢の弟、小一郎じゃ。」

(えっ!) 小竹はおどろいた。(小一郎? いつのまに、おいらはそんな名前になったのか。)

「小一郎どのですか。」ねねは、小竹をやさしく見つめた。「藤吉郎どのには、もつたいないくらいの弟さまですね。これから藤吉郎どのを、しつかり支えてくださいね。」

小竹は胸をどぎまぎさせてうなずいた。藤吉郎は満面の笑みで、小竹にいった。

「たのむぞ、木下小一郎。おまえはたつた一人の、おれの弟だからな。」

(そうか。) 小竹は思った。(おいらは農民の小竹ではなく、織田信長さまの下で働く、木

下藤吉郎の弟で、その家来、木下小一郎になったのか。)

小一郎の胸に、すんと落ちるものがあつた。

(おいらは、これから出世していく兄を支え、もり立てていく役まわりなのだ。)

そうしたことを、このとき小一郎はすなおに受け入れたのである。

「みなの方、おれの弟、木下小一郎だぞ。」藤吉郎は小一郎を、足軽たちに紹介した。

「小一郎は若いころから、みっちり体をきたえていたから、相撲をとったら、めつぼう強

いぞ。」

(なんだって?) 小一郎は面くらった。(相撲が強い? 兄さん、無茶なほらを吹いて。おいらは相撲なんかとつたことないぞ。)

主君の信長が太の相撲好きだと知っていた足輕たちは、顔を見合わせて、ひそひそといかわした。

「たしかに、頭の弟にしては、顔も丸いし、体もでかい。」

「ひよつとして、お屋形さまのお氣に入りの相撲とりかもしれないぞ。」

「いいか、みんな。」藤吉郎は足輕たちを見まわした。「おれはお屋形さまの近くでおつとめせねばならんから、これからは、小一郎がおまえらの面倒を見る。おれの命令だと思つて、小一郎にしたがうのだぞ。」

(え?) 小一郎はとまどつた。(おいらが、この人たちの面倒を見るのか?)

三十人の足輕たちは、ひとくせも、ふたくせもありそうな面がまえたつた。生きるか死ぬかの戦を何度もくぐりぬけた、ひとすじなわではいけない者たちばかりだつた。

(おいらに、そんなことができるのか?)

小一郎は足がふるえるのを感じた。しかし、こみあげてくる不安を、あごをぐつとひいて、飲みこんだ。

（いきなり、兄さんに無理なことをさせられる。それがおいらの役まわりなのだ。兄さんを支えるということは、こういうことなのだ……。）

小一郎は足軽たちを一人一人見やつて、迷いのない口調でいった。

「みな衆が、木下組にいてよかったと思えるよう心がけるので、よろしくたのむ。」

「ようし、よし！」藤吉郎がからからと笑った。「木下組の新しい船出だつ！」

まず三十人の足軽たちの名を、小一郎はしっかりと覚えたと覚えた。そして、一人一人の性格や好みを細かく観察した。

荒くれ者たちはすぐに喧嘩して、もめごとを起こしたが、小一郎はすぐ間に入つて、両者のいいぶんを、じっくりと聞いてやった。そして、これ以上もめなないように仲なおりさせる、藤吉郎からもらった金を気前よく使つて、足軽たちに飯や酒をふるまつた。

なによりも足軽たちがいいことを、小一郎はうん、うんと、ていねいに聞いてやったのだ。こうした誠実で、地道なおこないが実を結び、足軽たちはいつか小一郎を尊敬す

るようになった。

このときの経験が生き、のちに「まごころの宰相」といわれ、だれからも信頼されて、人と人の間に入って関係をじょうずに調整する、温厚な人がらとなつていったのである。

二

「小一郎、合戦だぞつ！」

城からもどつて来た藤吉郎が、気持ちを高ぶらせた声で、小一郎にいった。

（とうとう、来たか。）

小一郎は心の動揺を隠して、たずねた。

「兄者、お屋形さまはどこを攻めるおつもりなのか？」

藤吉郎はひとさし指で、北の方角を差した。

「むろん、美濃だ。」

美濃は、尾張よりも大きな国だった。信長は、元の国主である斎藤道三の娘、濃姫を妻

にもらつて、美濃みのと同盟どうめいを結むすんでいたが、道三どうざんは子この義龍よしたつに攻め殺ころされ、いまは義龍よしたつの子の、龍興たつおきが美濃みのを支配しはいしていた。

「美濃みのをとれば、お屋形やかたさまの天下てんかとりは近ちかづくぞ。」藤吉郎とうきちろうは声こえをはずませた。「小一郎こいちろう、いよいよ出番でばんがやつて来たきのだ。いまこそ、手てがらを立たてるときだぞ。」

（しかし……）小一郎こいちろうは内心ないしんとまどつた。（兄者あにじやはともかく、戦いくさにいつぺんも出でたことのないわたし、どんな手てがらを立たてられるというのか……。）

「しかしな……。」藤吉郎とうきちろうがひとさし指ゆびを立たてて、左右さゆうにふつた。「かんたんには勝かてぬぞ。美濃みのには、竹中半兵衛たけなかはんべえという軍師ぐんしがいるからな。」

「竹中、半兵衛？」

小一郎こいちろうはその名なを頭あたまにきざみこんだ。

「そうだ。」藤吉郎とうきちろうはうなずいた。「美濃みのにはもつたいない、お屋形やかたさまにおつかえするのがふさわしい、すぐれた軍師ぐんしだ。」

たしかに軍師半兵衛ぐんしはんべえのいる美濃みのは、かんたんには攻めとれなかつた。

美濃攻めみのぜを何度なんどかこころみたものの、苦戦くせんを強しいられた信長のぶながは、ひとまず兵へいをひき、三み

河の松平元康（のちの徳川家康）に同盟を申しこんだ。

「どうだ、手を組まぬか。」

元康は今川義元が死んだあと、今川の支配から独立して、三河にもどつていたが、信長の申しこみをこころよく受けた。

「よし、東は気にせずともよくなつたな。」

三河との同盟に気をよくした信長はひそかに都へ行き、將軍の足利義輝に会つて、「尾張の守護大名に任ずる。」との命を受け、堺で鉄砲を仕入れた。

「今度こそ、攻め落としてやる。」

だが、西美濃へ出陣した信長は、またしても半兵衛の作戦に手こずつて、むなしく尾張にもどつてきた。苦い顔の信長に、藤吉郎はそつと進言した。

「お屋形さま。美濃の稲葉山城はここから遠すぎます。出城をつくるのが、よいかと。」
信長は藤吉郎をじろりと見た。

「どこにつくるのだ、猿。」

藤吉郎は、どこにつくるとは、いわなかった。作戦のかんじんなところは、信長が決め

るかたちにしなければならなかったからだ。

「……できますれば、美濃みのの、どこか領地りやうち内に。」

切れ長のするどい目を藤吉郎とうきちろうに向けて、信長のぶながはいった。

「墨俣すのまただな。」

墨俣すのまたは、美濃みのの二つの川かわが合流ごうりゅうする、かなめの地ちだった。

「お屋形やかたさま。」藤吉郎とうきちろうは顔をくしゃくしゃにした。「それは、妙案みょうあんでござりますな。」

しかし、墨俣すのまたに出城でじやうをつくるのはかんたんではなかった。

佐々成政さつさなりまさや佐久間信盛さくまのぶもり、柴田勝家しばたかついえといった織田家おだけの武将ぶしやうたちが砦とりでをきざろうとしたが、

作戦さくせんのちゆうで美濃軍みのぐんにおそわれ、墨俣すのまたからしりぞかざるをえなかったのだ。

「墨俣すのまたに砦とりでをつくるのは、無理むりでございます。」

口くちをあわせて弁解べんかいする三人にんに、信長のぶながは目めをつりあげて怒おこった。

「無能むのうな者ものたちよ！ だれか墨俣すのまたに砦とりでをきざける者ものはおらぬのかっ！」

このときとばかり、藤吉郎とうきちろうが高々たかだかと手てを上げた。

「そのお仕事しごと、ぜひ、わたくしめにおまかせくださりませ。」

織田家の家臣たちはいやな顔をした。とりわけ砦づくりをしくじった三人は、ふゆかいな顔を隠さなかった。

（農夫のこせがれが、身のほども知らずに。）

（猿めに、できるものか。）

並みいる家臣たちが藤吉郎への反感をつのらせるなか、信長はするどい目で、藤吉郎を見やっただ。

「猿、おぬしにできるのか。」

「はつ。」藤吉郎はひれ伏した。「なにとぞ、おまかせくださりませ。その砦、それががつくつてみせます。」

信長は冷やかな顔でいった。

「そこまでいうのなら、やってみろ。しかし、仕上がらぬときは、首が飛ぶぞ。」

藤吉郎は顔を上げ、きつぱりといいきった。

「ははつ。それがし、命に代えても仕上げてごらんにいたします。」

「小一郎、来たぞ、来たぞつ！ おれの出番がやって来たぞつ！」

足輕長屋に駆けこんできた藤吉郎に、いきなりそういわれて、小一郎はとまどつた。

（出番？ 兄者は信長さまに、なにを約束してきたのか？）

小一郎はおそろおそろたずねた。

「兄者、出番とは？」

「墨俣に砦をつくるのよ。佐々さま、佐久間さま、柴田さまがしくじつた仕事を、お屋形

さまが命じられたのだ。」藤吉郎は真顔でいった。「もしもしくじつたら、おれの首は飛

ぶ。」

（なんということか。）小一郎はおどろいた。（そんな大変な仕事を、引き受けたのか。）

不安な気持ちを押し隠して、小一郎はたずねた。

「柴田さまでさえしくじつた仕事に、兄者は自信があるんか？」

「むろんよ。」藤吉郎は胸をぐうつとはった。「おれはな、とうに計画をたてていたんだ。

いいか、なぜ墨俣に砦をつくるのがむずかしいか。それは敵地で、材木を組み立てようとするからだ。そんなことをしていたら、たちまち敵に攻めこまれるに決まっている。」

「ならば、どうすればいいと、兄者は考えているのか？」

「それはな、川の上流で、あらかじめ材を組み立ておくのよ。それをいかで流して、墨俣の地で、すばやく砦をきずくのさ。」

（なるほど。）小一郎は、あつとおどろいた。（そういうやり方があつたのか。並の武将たちでは考えもつかない作戦をひねり出すとは、兄者はすごい。）

あらためて小一郎は、藤吉郎の発想力に感心した。

「どうだ、これでお屋形さまに約束した砦ができるぞ。」藤吉郎は顔をくしやくしやにしたあと、ぴんと、ひとさし指を立てた。「だがな、小一郎。この妙案には、一つ欠かせないものがある。」

「欠かせないもの？」

小一郎がたずねると、藤吉郎はにやりと笑った。

「それを、これから手に入れに行くのだ。小一郎、おまえもついて来い。」

藤吉郎が小一郎を連れて行ったのは、蜂須賀小六の館だった。

尾張と美濃、伊勢の境界の地にあった蜂須賀村の土豪、蜂須賀小六はどの大名にも属さず、戦のたびに有利なほうについて、金銭をかせいでいた。まわりの地侍たちの頭である小六の館には、野武士や川並衆と呼ばれる者たちが、ごろごろたむろしていた。

「おう、猿。いや、いまは木下藤吉郎どのではないか。」

信長につかえる前の藤吉郎を知っていた小六はひげをふるわせて笑い、藤吉郎をむかえた。

しかし、墨俣に出城をつくるのを協力してくれと、藤吉郎がたのむと、とたんにしぶい顔になった。

「おれは、信長がきらいだ。あやつは平気で弟を殺したり、旧主を殺したり、やり方が冷酷すぎる。あんなやつの下に、おれはつきたくない。おれはだれの下にもつかず、自由気ままに生きていきたいのだ。」

小一郎は藤吉郎の顔を見やつた。

(兄者、あんなことをいわれて、どうするんじや?)

すると、藤吉郎は顔を真っ赤にして、とうとうと述べたてた。

「よいか、小六どの。これからは信長さまの時代が来る。あの田楽狭間を見よ。三千の兵で、二万五千の今川勢を打ち破つたのだぞ。信長さまにはたぐいまれな運と力がそなわっている。信長さまは、おれのような農民あがりには、美濃攻めの大役をまかせられたのだぞ。信長さまにとっては、家柄とか地位とかはどうでもいいのだ。たいせつなのは、有能かどうかだ。小六どの、尾張と美濃の戦いは、尾張が勝つと思わぬか。」

小六はにが顔をして、藤吉郎を見た。

「尾張が勝つたとき、蜂須賀村で勝手気ままに動いている野武士たちを、信長さまはどうなさるか。すべては、小六どのがわれらにどう協力するかにかかっておる。」藤吉郎は小六の目を見つめ、きつぱりといった。「こたび協力してくれたなら、藤吉郎が命に代えて、小六どのを織田家の武將にとりたてていただく。藤吉郎はかならず約束を守る。」

小六はまだ迷っている顔で、藤吉郎の横にひかえていた小一郎に、目をやつた。小一郎

は小六の顔をまっすぐに見すえ、しずかにいった。

「小六どの。兄者はかならず、約束を守ります。」

小六は、ふつと笑みを浮かべた。

「そなたは藤吉郎どのの弟、小一郎どのか。落ちついた、よい顔をしておる。」

このとき小一郎は、蜂須賀小六に初めて会ったにもかかわらず、長くつきあつてきたような親しみを覚えていた。

（この人は信じられる。ここぞというところで、兄者を助けてくれる。）

しぶつていた小六の顔が、小一郎の口ぞえにやわらいだのを察知すると、藤吉郎はすぐさま信長からもらった金銭を、ふところから取り出した。

「小六どの。これはご苦労料だ。」藤吉郎はみずからは一文もとらず、すべてを小六にわたした。「小六どのたちで、山分けされよ。」

小六は息をつき、藤吉郎と小一郎を順に見やつてから、心を決めたようにいった。

「わかった、協力しよう。だが、おれは信長の下にはつかぬ。木下藤吉郎の下にはついて、信長の下にはつかぬ。それでいいな。」

藤吉郎は茶色の目をかがやかせ、顔をくしゃくしゃにして、何度もうなずいた。

「わかった。小六どのが、それがいいというのなら、そうしよう。」

小六は豪快に笑って、野太い声でいった。

「むかし、諸国をわたり歩いていたころのそなたが、おれにいったろう。おれを太名にしてやるとな。それを、おれは信じているからな。」

（海のものとも、山のものともつかない、はぐれ者のときに、そんな大ぼらを吹いたのか、兄者は。）小一郎は藤吉郎と小六をかわるがわる見やった。（いったいどんな顔で、兄者は小六どのに、そんなほらを吹いたのだろう……。）

そのときの二人の様子を想像しながら、小一郎は兄の顔をつくづくと見やって、心のかで強く思った。

（兄者の吹いたほらが、ほらではなくなるよう、しっかりと手助けする。それがわたしの役目なのだ……。）

小六は、さっそく動いた。数千の野武士たちを集め、砦をつくるのに必要な材木と人数をそろえたのだ。

とうきちろう
藤吉郎の秘策はあたった。味方の陣である
おわり
尾張の地で、あらかじめ材木を組み立て、川
じよりやう
の上流から墨俣にはこび、あつという間に砦
すのまた
をきずいてしまったのだ。

とつぜん
突然あらわれた一夜城に、美濃兵はおどろ
いちやじよう
いた。あわてて攻めようとしたが、墨俣城に
すのまたじよう
たてこもっていた数千の野武士たちに、押し
すうせん
もどされてしまった。

でじろ
のどもとに突きつけられた出城に、美濃の
ぶし
武将たちは動揺したが、稲葉山城の斎藤龍興
いなばやまじよう
は強がつていった。

おそ
「たかが出城一つ、恐れるな。わが稲葉山城
いなばやまじよう
を攻め落とすことはできぬ。」



四

「でかした、猿。」

信長はよろこび、並みいる織田家の武將たちの前でほめた。武將たちは、まさかと思つていたことが実現したのにおどろき、藤吉郎の底知れない力を知つた。

「お屋形さま、お願いがござります。」藤吉郎はひれ伏した。「墨俣に出城をつくるのに、蜂須賀村の小六どのが力をつくしてくれました。そこで、小六どのをぜひに……。」

「めしかかえよ、というのか。」

「はっ。」

藤吉郎が顔を上げると、信長はいった。

「わかった。そなたの与力にいたせ。」

与力とは、身分は信長の家臣だが、実質は藤吉郎の下で働くというものだった。

「ありがたき、しあわせにござりまする。」

藤吉郎とうきちろうがひれ伏すと、信長のぶながはさらにいった。

「猿さる、墨俣すのまたの出城でじろ、そなたにまかせる。名なも、秀吉ひでよしと名なのれ。」

「えつ。」

藤吉郎とうきちろうはおどろいた。ついこのあいだまで草履ぞうりとりだった藤吉郎とうきちろうが、蜂須賀党はちすかとうの野武のぶ士し、二千人にんを従したがえたうえ、小さいながらも一城いちじょうのあるじとなり、名なも秀吉ひでよしと名なのることをゆるされたのだ。そのめざましいばかりの出世しゅっせに、武將ぶしょうたちは、すべては実力じつりよくしだいという信長のぶながのやり方かたを、あらためて思い知らされた。

「ところで、猿さる。」信長のぶながはいった。「墨俣すのまたから、美濃みのをどう攻めせるか、いつてみる。」

「はつ。」藤吉郎とうきちろうはずっと考えていたことをいった。「美濃みのには、竹中半兵衛たけなかはんべえがおりまする。」

「うむ。」

信長のぶながは苦い顔かおをした。

「半兵衛はんべえがいるかぎり、尾張おわりは苦戦くせんを強しいられます。」藤吉郎とうきちろうはここぞとばかり、いいきった。「半兵衛はんべえを、味方みかたにひきいれましょう。」

信長のぶながはおどろいた。

「できるか、猿さる。」

藤吉郎とうきちろうはひれ伏ふしていった。

「なんとか、やってみます。」

息いきを切きらして飛とぶように走はしり、城しろから足輕長屋あしがるながやに駆けもどつてくると、藤吉郎とうきちろうは小一郎こいちろうにいった。

「城しろだつ！ 小一郎こいちろう、城しろをもらつたぞつ！」

小一郎こいちろうはびつくりした。

「まことか、兄者あにじや。」

「まこと、まこと。おれたちが砦とりでをきずいた墨俣城すのまたじょうを、お屋形やかたさまがくださつたのだ。そのうえ、秀吉ひでよしと名なのるやうにいわれたのだ。いまから、おれは木下秀吉きのしたひでよしなのだぞ。」

ぐつと胸むねをはつて、秀吉ひでよしはいった。

「だがな、小一郎こいちろう。こんなものでは終わおらんぞ。おれの城しろはもつと、でっかい、でっかい

城しろだからな。おまえが五つのときに、おれが木きに登のぼつてさけんだのを、覚えてるだろう。」

「ああ、覚えてる。」小一郎こいちろうはうなずいた。「見えるぞ、おいらの城しろが見えるぞつて、さけんだのを。」

秀吉ひでよしはきらきらと茶色ちやいろの目をかがやかせた。

「まずは第一歩だいいつぽの城しろだ。いいか、小一郎こいちろう。これからおれは、どんどん城しろをでつかくしていくからな。」それから秀吉ひでよしは真顔まがほになつて、口くちごもつた。「だがな、小一郎こいちろう。そのために、おれはしなければならぬことがある。お屋形やかたさまに、約束やくそくしてしまつたのだ……。」

秀吉ひでよしの話はなしを聞いて、小一郎こいちろうは思おもつた。

(「またも、むずかしいことを約束やくそくしたな、兄者あにじやは……。)

秀吉ひでよしの顔かほを見みやつて、小一郎こいちろうはたずねた。

「兄者あにじやは、天才軍師てんさいぐんしの竹中半兵衛たけなかはんべえさまを、味方みかたにひきいれる自信じしんがあるのか？」

「いまが好機こうきなのだ、小一郎こいちろう。」秀吉ひでよしはぐつとあごをひいて、うなずいた。「半兵衛はんべえどの

は、あるじの龍興たつおきにきらわれ、菩提山ぼだいさんにこもつてゐる。このときを逃のがさず、真心まごころをこめて

説きふせれば、半兵衛どのはわかつてくれる。味方になつてくれる。おれには自信がある。」

小一郎は、秀吉のゆるがない信念を感じた。

（兄者のこの信念は、どこから来るのだろう？　しかし、これまで、できそうもないことをやってきた兄者だから、やりとげるかもしれないぞ……。）

茶色の目をほそめて、秀吉はいつた。

「菩提山にいつしよに行つてくれるな、小一郎。」

小一郎は秀吉の真剣な顔を見つめて、深くうなずいた。

五

（この人が、天才軍師とうたわれている、竹中半兵衛さまか。）

秀吉に連れられ、菩提山にこもっている竹中半兵衛に会ったとき、やせた長身の姿に、小一郎は感銘を受けた。

(この人には、欲がない。)

澄みきつたまなざしには、嘘のない真心が感じられたのだ。

「いやあ、半兵衛どの。」

秀吉はまるで長年の友に会ったように、顔をくしやくしやにして笑い、あいさつした。

(さすがは兄者、いきなり半兵衛どのの心に飛びこもうとしている。)

秀吉のそばにひっそりとひかえて、小一郎は半兵衛の顔を見やった。

(半兵衛さまは冷静なお方だから、兄者のことばを、そうたやすくは受け入れまい……。)

小一郎がそう感じていると、秀吉は顔を赤くして話しつづけた。

「いやあ、もったいない。半兵衛どののような、めったにいない、才能あふれた軍師をな

いがしろにするとは、美濃のあるじはなにを考えておられるのか。もったいなや。もった

いなや。」それから秀吉は核心をついた。「いかがでござりますか。このさい半兵衛さま

の、かつやくの場をうつされてみては？」

(半兵衛どのが、半兵衛さまになったぞ。より、うやまう気持ち、こめたな……。)

小一郎は秀吉の細かい気配りに、内心感心した。

「信長につけ、といわれるのか？」

半兵衛はしずかにいうと、秀吉がうなずいた。

「はい。美濃は、信長さまにゆずるといふ、亡き道三さまのことばもいただいております。考えてもくださりませ。いまの龍興さまが、ほんとうに美濃の領主として、ふさわしいお方かどうか。」

半兵衛はくるしげな表情を浮かべた。

「正直なお方だ。兄者と同じことを、つねづね感じておられたのだな……。」

小一郎が思っている、半兵衛は首を横にふって、きつぱりといった。

「いや、わたしは美濃に生まれ、美濃で育った。いまさら尾張に行くつもりはない。」

菩提山からの帰り道、秀吉は小一郎にいった。

「いやあ、さすがにすぐれたお方だ。ますます、おれは気に入ったぞ。」

小一郎は秀吉の顔を見た。あつさりことわられたのをまったく気にしていない兄を、小

一郎はたのもしく思った。

（半兵衛さまはうわさにたがわず、すばらしいお方だ。味方につけるのはかんたんではな



いが、兄者あにじやなら説きふせるにちがいない……。」

秀吉ひでよしはうんうんと、一人ひとりうなずきながら、明あかるい声こえでいった。

「おれは信しんじているぞ、小一郎こいちろう。半兵衛はんべえどのはかならず味方みかたにつく。かならずな。」
ことわられても、ことわられても、秀吉ひでよしはあきらめなかつた。くりかえし菩提山ぼだいさんをおとずれ、真心まごころをこめて、ひたむきに半兵衛はんべえにうったえつづけた。

（これが兄者あにじやのいいところだ。）小一郎こいちろうは思おもつた。（こうと決きめたら、あきらめない。わたしの役目やくめは、兄者あにじやの信念しんねんがまちがった方ほうに向むかわないかどうか、冷静れいせいに見みきわめて、助けたすることだ……。）

そのうちに、かたくなにことわりつづけていた半兵衛はんべえの心こころが、すこしずつやわらいできたのを、小一郎こいちろうは感かんじた。

やがて秀吉ひでよしは、半兵衛はんべえの心こころを動うごかすのに、もつともふさわしい言葉ことばをみつけた。

「半兵衛はんべえどのの才能さいのうを、うもれさせてはなりませぬ。半兵衛はんべえさまのそれは、天下てんかとりの才能のうです。美濃みので朽くちはてさせては、もつたいのうござります。」

小一郎こいちろうは、内心ないしんうなつた。

（どのと、さまを、たくみに使い分けながら、半兵衛さまの心にもっとも響くせりふを見つけたな、兄者。）

すると、半兵衛がふうつと息を吐いた。

（半兵衛さまも、同じ思いを抱いておられたのだ。）小一郎は思った。（みずからの才がむなしくうもれていくのが、いかにも無念だと感じておられたのだ……。）

そのとき半兵衛が、秀吉のそばにひかえていた小一郎に、目をやった。そして小一郎の目をじつと見つめた。

小一郎は、半兵衛の目がかぎりなく澄みきっているのを感じた。

（この人はいま、わたしの心を読みとられた。そして、いかに生きるべきか、おのれの力がどんぶんに生かせる道はなにか、それを思いさだめられたのだ……。）

秀吉が半兵衛のまなざしに気づいて、いった。

「ずっと申しおくれていましたが、弟の小一郎です。」

小一郎は頭を深く下げた。

「木下小一郎でございます。」

半兵衛はんべえはにこやかにうなずいた。

「弟おとうとごでありましたか。兄あにの秀吉ひでよしどのとはちがう、落ちついたまなざしをしておられる。」そういつてから、半兵衛はんべえは心こころを決めた声こえで、秀吉ひでよしにいった。「わかりました。お味方みかたいたしましょう。ただし、わたしは信長のぶながどのの下したには、つきたくありません。」

「と、申もうされますと？」

秀吉ひでよしの問といに、半兵衛はんべえはさわやかに告つげた。

「木下秀吉きのしたひでよしどのの下したになら、よろこんでつきたいと思おもいます。」